

家持の相聞歌

—— 恭仁京時代 ——

村 瀬 憲 夫

一 はじめに

天平十二年（七四〇）の九月、筑紫の地で藤原広嗣の乱が起きた。奈良の都から遠く離れた地での出来事ではあったが、聖武天皇は翌十月、伊勢国へ向けて都を後にする。途中、広嗣逮捕の知らせが届くも、そのまま行幸は続けられ、十二月には恭仁京遷都が決定された。以後、天平十六年二月に難波遷都が宣せられるまで、都は恭仁にあった。恭仁京時代である。

この恭仁京時代、大伴家持はすでに内舍人として出仕し、官人としての道を歩みはじめていた。年齢で言えば二十代前半から後半にかけての多感な時期である。将来への期待と不安とが交錯する時期である。ことに家持の場合、大伴氏の将来が彼の肩にかかっていた。しかも、

恭仁京遷都を導いたのは、橘諸兄であった。皇親政治を理想とする橘氏と大伴氏とは近い関係にあった。

このように、恭仁京時代は、家持の生涯において極めて重要な意味合いをもった時期であったと思われる。この時期の家持については、昭和六十年度上代文学会万葉夏季大学（家持を考える）において、主として万葉集の編纂という視点から、その種々相を探ってみた。本稿では、その折に触れることの出来なかつた、恭仁京時代における家持の相聞歌について考えてみたいと思う。

もちろん、家持の相聞歌が、恭仁京時代にいたって急激に変貌するというわけではないが、多少の特徴は指摘することができる。本稿ではその具体相を、「一重山」「黒木」を詠んだ二つの歌群を取り上げ検討することによって、探ってみたい。

二 一重山歌群をめぐって

(一)

久邇京に在りて、寧楽の宅に留まれる坂上大嬢を思ひて、大伴宿禰家持の作る歌一首

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ^(一) (④七六五)

藤原郎女、これを聞きて即ち和ふる歌一首

道遠み来じとは知れるものからに然そ待つらむ君が目を欲り (④七六六)

大伴宿禰家持、更に大嬢に贈る歌二首

都路を遠みか妹がこのころは祈^ひひて寝れど夢に見え来ぬ (④七六七)

今知らず久邇の都に妹に逢はず久しくなりぬ行きてはや見な (④七六八)

恭仁京の家持が奈良の坂上大嬢を思つて詠んだ歌をめぐつての歌群(一重山歌群と呼ぶことにする)である。この歌群に關してまず指摘できる特徴は、家持が坂上大嬢に詠んだ歌に対して、藤原郎女が「これを聞きて即ち和」えているという、歌のやりとりのあり方である。

もちろん④七六五番歌の題詞には「思ひて」とあつて、「贈る」とは書かれていない。しかし、続く④七六七・

七六八番歌の題詞に「更に大嬢に贈る」とあるところからすれば、④七六五番歌も大嬢に贈ることを念頭に置いて詠まれたものであると考えられる。そういった、言わば一対一の男女の密室の相聞であるべき歌に、第三者(家持と藤原郎女とはどのような間柄にあるのか不明である)が「これを聞きて即ち和ふる」というかたちで介入してくるところに、言わば広間の相聞へと広がりを見せる、家持の相聞歌の世界の具体相を見ることが出来る。

こういった歌のやりとりのあり方は、その類似例を、例えば額田王と鏡王女のやりとり(④四八八・四八九)に、その早い例を見出すことが出来、それほど目新しいものではない。しかし家持の相聞歌の世界においては、やはりひとつの新しい特徴と言うことが出来る。

さらにもうひとつ指摘しておきたいことは、家持の歌を聞いた藤原郎女が、「即ち和」えた、すなわち「即和歌」で対応しているということである。この藤原郎女の行為は、『伊勢物語』第一段ふうに言えば「いちちはやきみやび」であり、この期の家持の周辺にこういった雰囲気醸成されていたことは、やはり注目すべきことであると思われる。

次に歌の内容に立ち入ってみてみよう。まず④七六五番歌の一・二句「一重山隔れるものを」は、「一重の山

が隔たつてゐるものを（一重の山がへだたつてゐてさうすぐに行けないものを）（『萬葉集注釋』）とるのが、最も穩当な解釈であると思われる。たとえ一重であろうとも、男女の間に物理的に横たわる山は、互いを隔てるものとして男女に強く意識されたであらう。現に恭仁京の家持が奈良の坂上大嬢に贈つた歌に

春霞たなびく山の隔れば妹に逢はずて月を經にける
（⑧一四六四）

とあることから、山を隔てることの重みは理解できる。ところが一方で、最近の注釈書の中には、新しい解釈を示すものがある。例えば「山一つ離れているだけなのに。（下に、逢いに行けないというような内容が省かれている）」（『萬葉集（日本古典文学全集）』）、「間には一重の山がへだたるだけのものを。（初二句、家持の気持ととる）」（『萬葉集（講談社文庫）』）などである。このような新しい解釈を許容するのは、「一重山」という表現であると思われる。

網児の山五百重隠せる佐堤の崎さて延へし子が夢にし見ゆる
（④六六二 市原王）

あしひきの山は百重に隠すとも妹は忘れじ直に逢ふまで
（⑩三二八九）

④七六五番歌の「一重山」が、この二首のように「五

百重山」「百重山」であつたなら、一首の解釈に揺れの生じる余地はない。「久邇京と奈良との間は直線距離にして約十キロメートル、低い奈良山が東西に横たわっているだけ」（『萬葉集全注』巻第四）であつたから、家持は「一重山」と表現したのであらうが、そこに現行の注釈書において解釈上揺れの生じる余地が残されたのである。先に述べたように、一首の解釈は、『萬葉集注釋』の示す説明が最も自然で無理がないと思われ、本稿もそれに依りたい。ただ、五百重山・百重山でなく、一重山であつたことが、実は家持・藤原郎女のやりとりにも微妙なずれ（このずれを二人は承知してやりとりをしている）をもたらしていると思われる。以下具体的にみてみる。

まず④七六五番歌を詠んだ時、家持は、二人の間を山が隔てているのでそれ程簡単には逢えないということを当然意識している。ただ、その山は

白雲の五百重に隠り遠くとも夕去らず見む妹があたりは
（⑩二〇二二）

のように五百重・百重ではなく、「一重」であつた。従つて家持の中には、「道遠し」という意識は薄かつたものと思われる。

家持の歌を聞いた藤原郎女は、その「一重山」に対して「道遠み」と応じた。「あなたは一重山とおっしゃい

ますが、待つ女にとつては、二人を隔てる山が（五百重ではなく）一重であっても、はるかに道遠く感じられるのです。そんなに道遠く隔たつていても、ひょっとして帰ってくるかもしれない、と待たれるのが待つ女の気持ちというものです。」と、奈良の坂上大嬢の気持ちを付度したのである。

このように藤原郎女は、一重山の持つ意味合いが、待つ女にとつては一層重いことを強調した。つまり、家持歌の「一重山」の意味合いを多少ずらしたのである。この藤原郎女の歌に対して、家持は応じた。

④七六七番歌において、家持は「なるほど郎女様のおっしゃるとおり、都への道は遠いのですね。」と、郎女の言を認めた。しかしそのままでは引き下がらなかった。相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど
(⑩二五八九)

の発想を踏まえて、「なるほどそれでわかりました。大嬢に逢いたいと祈つて寝ても、夢にも見えませんのが。道が遠いからなのですね。」と、道が遠くて夢にさえも現れない（道の遠さをものともせず）に夢に現われるほどには私のことを思っていない、すなわち「相思は」ぬ⁽³⁾。坂上大嬢に対して、一種なじるような口調（もちろん本心ではない）で歌いかけた。郎女の「道遠み」という言葉を逆用

したのである。

以上見てきたように、坂上大嬢への相聞の歌をめぐつて、家持と藤原郎女とが、「一重山」「道遠み」の語の意味を、微妙にずらせ、逆用しながら、歌のやりとりをしている（もう少し言えば楽しんでさえいる）様を知ることができる。ここに、この期における家持の、かなり成熟した相聞のやりとり、つまり相聞歌の世界の広がり指摘することができる。

(一一)

一重山を詠んだ歌は万葉集中にもう一首ある。巻六に収められた次の歌である。

高丘河内連の歌二首

故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそ我がせし
(⑥二〇三八)

我が背子と二人し居らば山高み里には月は照らずともよし
(⑥二〇三九)

この二首は、巻六の中でも恭仁京時代の歌が収められている部分に置かれているので、恭仁京での作と考えられる。従つて「故郷」は奈良古京である。

諸注釈書は、一重山の例として、④七六五・⑥一〇三八の二首をあげるも、両者の関連性には言及しない。ただ『萬葉集全註釋』は、両者の直接的な関連を指摘する。

本稿も『全註釋』の説に賛成したい。理由は次のような点にある。(イ)両者は共に恭仁京での作であること。

(ロ)一重山を詠んだ歌は集中この二首のみであること。

(ハ)④七六五番歌を受けた七六六番歌の「道遠み」と、⑥

一〇三八番歌の「故郷は遠くもあらず」とが話題として共通していること。(ニ)相聞感情に関連する「月」が、④

七六五番歌と⑥一〇三九番歌の両者に詠まれていること。

以上の理由で、一重山を詠んだ二首は相関連するものと考え、先に見たように、④七六五番の一重山歌とそれに続く三首は一連のものと考えられるゆえ、結局④七六五〜七六八番歌と⑥一〇三八〜一〇三九番歌との二歌群は、相関連する歌群と考えられる。

では、この二歌群はどのように関連するのであろうか。まず両歌群の時間的前後関係についてみておきたい。

『全註釋』は、高丘河内の⑥一〇三八番歌を受けて、家持の④七六五番歌が詠まれた、すなわち高丘河内の歌群の方が時間的に先であるとする。

本稿は家持・藤原郎女の歌群の方が先であると考える。両歌群の作歌年次は不明であるものの、おおよその見当はつく。まず高丘河内の二首は、卷六所収歌の配列がほぼ年代順になっていることからすれば、天平十五年八月(⑥一〇三七番歌の作歌年次)から天平十六年正月(⑥一〇

四一番歌の作歌年次)までの間に詠まれた歌であると推定できる。

一方、家持・藤原郎女の歌群の作歌年次は一層漠然としている。が、この歌群は、卷四中の恭仁京時代の歌がまとめられている部分の冒頭部(少なくとも題詞によって恭仁京時代の作と分かる部分の冒頭)に置かれている。卷四も大雑把には年代順の配列をもつ巻であること、「まだ家族を奈良に留めておいた頃のことである」(『全註釋』)こと等からすれば、この歌群の作歌年次は恭仁京時代初期と考えてよいであろう。従って、家持・藤原郎女歌群が先で、高丘河内の歌群が後ということになる。

次に歌の内容に即して両歌群の関連の仕方をみてみよう。まず「一重山」「道遠み」の語をめぐっての、家持と郎女とのやりとりに対して、高丘河内は「道遠み」を否定して「故郷は遠くもあらず」と言い切っている。が、その一方で「一重山越ゆるがからに思ひそ我がせし」と、一重の山を越えるだけに恋しい思いが募るものだと詠む。離れて住む二人にとっては、たとえ道は遠く隔たっていないくとも、山一重隔てるだけで恋しさが一層募る、すなわち遠く隔たっている(「道遠し」)ように感じられるものなのだ、一重山のもつ意味の重みを歌う中で、物理的距離の短かさにもかかわらず、心の中に広がる距離

感と一層深まる恋心とを認めているのである。

続く⑥一〇三九番歌で、高丘河内は、二人一緒にいられるならば、たとえ里に月が照らなくとも構わないと歌う。これも前歌の距離感の問題と同じく、月のあるなしの問題も多分に心理的なものだと言っているのである。ここで月を持ち出したのは、恐らく、家持の「月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ」(④七六五)を踏まえたためであろう。

以上みてきたように、高丘河内の歌は、家持・藤原郎女・(坂上大嬢)の歌のやりとりを承知した上で、それに和するような形で詠まれたものであろうと思われる。⁽⁶⁾家持と郎女との間を仲裁するかのように、両者の意向を程よく認めつつ、一重山と月夜の心理分析をしてみせているのである。ここには、青々しい男女の歌のやりとりに対して、人生の先輩として、ゆつたりと教諭するように「要するに心のあり方の問題なのだよ。」とほえみかけている高丘河内の姿を、恭仁の都のある日ある場所での和やかな語りの中に、思い描くことができる。

さてその高丘河内は、『続日本紀』によれば、養老五年正月二十三日に「退朝の後、東宮に侍せし」められている。この時、他に佐為王・山上憶良の名もみえる。そして同月二十七日に「宜しく、百僚の内、学業に優遊し、

師範たるに堪ふる者を擢んで、特に賞賜を加へ、後生を勧め励すべし。」とあるなかで、高丘河内は文章の師範たる者として選ばれている。さらには神護景雲二年六月二十八日条に、いつのことか不明ながら大学頭であったことも記されている。また『家伝下』(藤原武智麻呂伝)では「文雅」の列に加えられている。ちなみに、共に「東宮に侍」した佐為王は「風流侍従」としてあげられている。このように高丘河内は当代一流の知識人・文人であったと言える。

このような一流文人との交わりが、相聞に関わる世界にまで広がっているのは注目すべきことであり、ここにも恭仁京時代における家持の相聞の世界の広がりを見ることができるのである。

三 黒木歌群をめぐって

(一)

恭仁京時代の相聞歌をもう一例みてみたい。

大伴宿禰家持、更に紀女郎に贈る歌五首

我妹子がやどのまがきを見に行かばけだし門より返してむかも
(④七七七)

うつたへにまがきの姿見まく欲り行かむと言へや君
を見にこそ
(④七七八)

板葺の黒木の屋根は山近し明日の日取りて持ちて参
み来む (④七七九)

黒木取り草も刈りつつ仕へめどいそしき和気と褒め
むともあらず「に云ふ」 (④七八〇)

ぬばたまの昨夜は返しつ今夜さへ我を帰すな道の長
手を (④七八一)

紀女郎は、名を小鹿と言ひ、安貴王(志貴皇子の孫。その子市原王と家持とは親しい間柄にあった。)の妻となつた人であり、この歌を贈られた頃には、「男女の間の機微を心得た年長の美女」(山崎馨「紀女郎小鹿考」『五味智英先生上代文学論叢』昭52・11)となつていた。

以下個々の言葉を検討する中で、この歌群(黒木歌群と呼ぶことにする)の特徴を探つてみたい。まず「和気」(④七八〇)に注意したい。この言葉に関しては、井手至「紀女郎の諧謔的技巧——「戯奴」をめぐる——」(『萬葉』40号昭36・7)に注目すべき指摘がある。井手論文は、紀女郎と家持との贈和歌

戯奴わげぬがため我が手もすまに春の野に抜ける茅
花を召して肥えませ (⑧一四六〇、紀女郎)

昼は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花君のみ見めや和気
さへに見よ (⑧一四六一、紀女郎)

我が君に戯奴は恋ふらし賜りたる茅花を食めどいや

瘦せに瘦す (⑧一四六二、大伴家持)

にみられる「わけ」は、紀女郎が年若き家持を諧謔的に卑しめて呼んだ、女郎の意図的な用法であり、その表記に「戯奴」なる用字を以てしたことは、その裏に「遊士(みやびを)」なる用字が介在したであろうこと、おそらくは紀女郎が、大伴田主と石川女郎との風流譚を想起し、その風流士問答を念頭に置いて書いたものであることを指摘した。田主と石川女郎との風流士問答とは、巻二に収められた次の歌である。

石川女郎、大伴宿禰田主に贈る歌一首

遊士みやびをと我は聞けるをやど貸さず我を帰せりおその風
流士みやびを (②一二六)

大伴宿禰田主の報へ贈る歌一首

遊士みやびをに我はありけりやど貸さず帰しし我そ風流士みやびを
はある (②一二七)

同じ石川女郎、更に大伴田主中郎に贈る歌一首

我が聞きし耳によく似る葦のうれの足ひく我が背つ
とめたぶべし (②一二八)

この贈報歌の作歌事情は一二六番歌の左注に詳しい。すなわち「容姿佳艶、風流秀絶」の大伴田主に対して、かねてより「双栖」の思いを抱いていた石川女郎は、あの夜一計を案じ、貧しい身なりの軀になりすまして、田

主のもとへ火を借りに行った。そうとは知らない田主は、乞われるがままに火を与え、女郎をそのまま帰してしまった。思いを遂げることの出来なかつた女郎は、翌朝、恥じらいと恨みと「譚戲」の気持ちをかめて歌を贈つた、というのである。

井手論文によれば、紀女郎は、この風流士問答にヒントを得て、諧謔的にいつて風流士(遊士)とは言えぬ存在である家持のことを、「遊士」ならぬ「戯奴」(⑧一四六〇)と呼んだ、そして一方の家持も、紀女郎の意図をよく察知して、自らの返歌にも「戯奴」(⑧一四六二)を詠み込んだのである。

本稿ではこの指摘を踏まえて、もう少し先に進めてみたい。井手論文は主として紀女郎の側からの分析を行っているが、本稿は家持の側に視点をあててみる。つまり、家持は、紀女郎の「戯奴」を受けて、この語を自らの返歌にも用いたのみならず、その後の紀女郎への贈歌に、田主・石川女郎の風流士問答を積極的に活用していると思われる節があるのである。

それが本節冒頭に掲げた黒木歌群である。まず④七八〇「和氣」(「和氣」は、当然先の「戯奴」(⑧一四六〇、一四六二)、「和氣」(⑧一四六二)を踏まえているのであろうから、黒木歌群に、田主・女郎の風流士問答が意識され

ている可能性は十分にある。

さらにこの黒木歌群は、「和氣」たる家持が、「君」たる紀女郎の家の門口を訪れ、しきりに逢いたがり、しかも家作りの材料の提供まで申し入れているのに、結局門前払いをくわされそうな気配を歌っている。これは、田主と石川女郎の場合と較べて、男女の立場(相聞関係における優位性)が逆転しているものの、かなり類似した男と女の関係であると言えよう。

このことを具体的な語句に即して指摘するならば、「けだし門より返してむかも」(④七七七)、「昨夜は返しつ今夜さへ我を帰すな」(④七八二)は、「やど貸さず我を帰せり」(②一二六)と対応する。また「勤」(④七八〇)と「勤たぶ」(②一二八)とは、意味的にはよく対応している。さらに言えば、「我妹子がやどまがきを見に行かば」(④七七七)、「うつたへにまがきの姿見まく欲り行かむと言へや」(④七七八)は、石川女郎が火を借りることを口実として田主のもとを訪れたことと相通じていると見られる。

以上見てきたように、この黒木歌群は、紀女郎の用いた「戯奴」が田主・女郎の風流士問答を念頭に置いているものであることを知った家持が、それを自らの紀女郎への贈歌に積極的に利用して詠んだ歌であったと言えよう。

風流士問答が背後にあることよって、この黒木歌群は言わば本歌取りがもたらすのと同じような効果を持ち、内容的に一層の深まりを持つこととなった。ここには、先行歌を利用して相聞歌に幅をもたせていくという、遊びの世界・余裕の世界の広がりを見ることができ、さて少々横道にそれるが、以上の諧謔的な趣きを備えた歌々を、今一度通覧すると、巻十六の家持の所謂「戯笑歌」の生まれてくる筋道がある程度理解できる。

まず風流士問答の②一ニ八番歌は、田主の足の不自由なことをあげ、からかっている。この風流士問答を踏まえて詠まれた、紀女郎と家持の歌(⑧一四六〇、一四六二)は、家持の痩せた体をあげつらっている。この歌との前後関係ははっきりしないが、

神さぶといなにはあらずはたやはたかくして後にさ
ぶしけむかも (④七六二、紀女郎)

百歳に老い舌出でてよよむとも我はいとはじ恋は益
すとも (④七六四、大伴家持)

も、老醜を諧謔的に歌ったものである。こういった肉体的弱点を諧謔的にあげつらう歌のやりとりの延長線上に、家持の「痩せた人を嗤笑ふ歌(⑩三八五三四)」が生まれたものと思われる。その一首、

瘦すも瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻を捕る

と川に流るな

(⑩三八五四)

の「はたやはた」は、紀女郎の「はたやはた」(④七六二)を受け継いでいるのであろう。このように紀女郎との相聞のやりとりは、家持を戯笑歌の世界にいざなう手助けをもしたと言えよう。

(一)

次に黒木歌群中の「黒木」を詠んだ歌(④七七九、七八〇)について考えてみたい。黒木を詠んだ歌は、万葉集中この他に二首ある。巻八に収められた次の一組みの歌である。

太上天皇の御製歌一首

はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代まで
に (⑧一六三七)

天皇の御製歌一首

あをによし奈良の山なる黒木もち造れる室は座せど
飽かぬかも (⑧一六三八)

右、聞くならく、左大臣長屋王の佐保の宅にい
まして肆宴したまふときの御製なりと。

時の左大臣長屋王の佐保の屋敷に、元正太上天皇・聖武天皇を迎えての肆宴での賀歌(室寿ぎの歌)である。作歌年次は記されていないが、神亀元年(聖武天皇即位、長屋王左大臣就任の年)から神亀六年(長屋王自尽の年)まで

の間の作であらう。

長屋王と言えば、その時代に赤人・金村たち宮廷歌人を輩出せしめ、宮廷讃歌の場を用意した人である(橋本達雄「山部赤人―長屋王との関連―」『万葉宮廷歌人の研究』昭50・2)。大梓の政界見取図で言えば、皇親派・守旧派に属する家持にとって、長屋王は関心措く能わざる人であった。ましてや「わが大君」として仰ぐ聖武天皇が、その長屋王宅を訪れての御歌であつてみれば、家持のこの二首の歌への思い入れには並々ならぬものがあつたはずである。

このことは、家持が自らの歌に黒木という語を使ったその背景に、長屋王宅での元正・聖武天皇の肆宴歌の存在があつた可能性のあることを示唆している。黒木の用例が万葉集中この四例のみに限られている、という用例の片寄りも、この推測を補強する。

この推測をもう少し確かなものにするためには、黒木歌群の中において、黒木が果たしている役割を、歌の内容に即して検討する必要がある。が、その前に考えておかなければならないのは、長屋王の屋敷に造られた「黒木も造れる室」すなわち樹皮を剝がなままの木材を用いて造つた家とは、どのようなものとして受け取られていたのであるか、ということである。

これは「風流な原始的な家屋」(『全註釋』)、「みやびの極み」(「後世の数寄屋造りの意識に近いもの」(廣岡義隆「鄙に目を向けた家持」『三重大学人文学部文化学科研究紀要』1号昭59・3)と受け取られていたものと思われる。

「みやび」が爛熟の極みにまで行き着き、飽食した貴族は、その果に「ひなび」の中に美を見出した(廣岡論文)であり、長屋王宅での二首は、「上皇・天皇・左大臣と、権力の中枢に座す人たちの趣味が唐趣味一辺倒のものではなく、その美的感覚も単純ではなかった」(中川幸廣「作者未詳歌の人びと―卷十の論―」『万葉の歌人たち』昭49・11)ことを示している。

本稿は以上の先行研究に賛成するが、その根拠を若干述べたい。まず『懷風藻』をみると、長屋王の佐保の邸宅(作宝楼)には多くの文人が集まり、文雅の宴遊が催され詩が賦されていたことがわかる。長屋王は漢詩文的文雅の世界に浸っていた人である。その人がわざわざひなびた黒木の家を造つて天皇を迎えたところに、形を変えた文雅・みやびを見るべきであらう。

また『続日本紀』神龜元年十一月八日条には、「その板屋草舎は中古の遺制にして、營し難く破れ易くして空しく民財を殫す。請ふ、有司に仰せて五位已上および庶人の營に堪へたる者をして瓦舎を構へ立て、塗りて赤白

となさしめん」と、板屋草舎をやめて瓦舎を奨励する由の太政官奏言が記されている。神龜元年と言えば、ちょうどこの二首が詠まれた頃である。瓦葺が奨励される風潮の中にあつて、時の左大臣があえて黒木造りの家を造つたのは、やはり「ひなび」の中に「みやび」を求めた結果であろう。

また時代は少々くだるが、『続紀』天平六年二月一日条には、天皇が朱雀門で歌垣を御覧になったこと、その場に五品已上の「風流ある者」は皆参加していたこと、『家伝下』に風流侍従と記された長田王・門部王たちが中心となつて、難波曲・倭部曲等の雅楽が演じられたことが記されている。歌垣は当時すでに地方にわずかに残る遺習となつていた。それが都で再現されているのも、「ひなび」の中の「みやび」の追求であろう。(参照、橋重孝「奈良時代の『風流』について」『古代文化』24巻1号昭47・1)

以上みてきたように、黒木の家は、時の左大臣長屋王の家としては、風流なみやびを尽くした家を意味したものとと思われる。では、家持がこの「黒木」を意識して、自らの黒木歌群にも詠み込んだとすれば、黒木はその中でどのような役割を果たしているのであろうか。

先に(一)項で見たように、この黒木歌群は田主・女郎

の風流土問答みやびおを意識していると思われる。「みやびお・田主」に対して、この歌群では男女の優位性が逆転して、「みやびめ・紀女郎」となる。一方の家持はどうか。

天皇に献る歌一首大伴坂上郎女、佐保の宅に在りて作る

あしひきの山にし居れば風流なみ我がするわざと
がめたまふな (472)

聖武天皇に献上した坂上郎女のこの歌(当然家持はこの歌を知悉していた)から、山近くに住む(477)家持は、風流なき男即ち「ひなびお・家持」と位置づけられる。

それで家持は、④七七九・七八〇番歌において、みやびめ・紀女郎に対して、「あなた様のお造りになるお屋敷は、あの長屋王様がお迎えしたお宅のように、さぞかしみやびを尽くした黒木の家でしょう。山がつの私めが、明日黒木を切ってお届けいたしましょう。」と、からかいの気持ちをも含めて歌い贈ったのである。このように、この黒木は、紀女郎のみやび性を具体的に言い表わす言葉としての役割を果たしているのである。

こうみてくると、家持は、紀女郎から風流土ならぬ戯奴とからかわれたのに対して、その背景となった田主・女郎の風流土問答を上手に利用し、しかも黒木造りの家という新たなみやびの素材を持ち出して歌っている。紀女郎の導いた世界を、家持はしっかりと受けとめ、さら

に深めて黒木歌群を成しているのである。ここに、家持の、みやびなるものへ指向する心と、成熟した相聞歌のやりとりの具体相をみることができる。

さらに言えば、こうした相聞歌の世界に、聖武天皇・長屋王といった公的世界での事柄が意識され取り込まれていることも、この期の家持歌の特徴として注目すべきことであると思われる。

四 おわりに

家持の恭仁京時代の相聞歌の中から、「一重山」「黒木」の二歌群についてみてきた。両歌群にわたって簡単なまとめをしておきたい。まず両歌群を通じて、相聞のやりとりが理的・技巧的・機知的・即興的になっていると言える。「一重山」「道遠み」「都路を遠み」といった言葉の意味を微妙にずらせながらのやりとり、「戯奴」と呼ばれたことをうまく取り入れ、その言葉の背景にある風流士問答を自分の歌に活かしていくその手法等である。そして黒木歌群に顕著にみられたように、みやびの世界を積極的に取り入れていこうとするのも、注目すべき特徴であった。これらのことを一言で言えば、家持の相聞歌が成熟度を増してきた、内容的に広がりを持ってきたということである。

次に指摘できる特徴は、家持の相聞歌が男女の一对一の世界に閉じこもるのではなく、より広い交流の世界へと開かれてきたということである。一重山歌群においては、坂上大嬢への思いを述べた歌に、藤原郎女という第三者が介在し、その郎女とのやりとりに高丘河内が一枚加わってくるという、相聞歌をめぐる交流の広がりが見られる。また黒木歌群においても、田主・石川女郎との問答の世界、あるいは長屋王宅のみやびやかな肆宴の世界を取り込んでいるところに、一重山歌群のような直接的な交流ではないにしろ、一種の交流の広がりをみることができる。

この人的交流の広がりという点についてももう少し敷衍すると、この二歌群に関わる人物として、坂上大嬢、藤原郎女、高丘河内(当代一流の文人。共に東宮に侍した佐為王は風流侍従の一人。恭仁京遷都を導き、家持とも近い間柄にあった橘諸兄は佐為王の兄)、紀女郎(安貴王の妻。安貴王の子市原王は家持と親交があった)、そして間接的ながら聖武天皇、長屋王、大伴坂上郎女等をあげることができ。二歌群に限ってみても、このように種々の人々との幅広い交流の中で、相聞歌が出来上っていることがわかる。こういった多くの人々との交流が、家持の相聞歌に厚みと広さをもたらしたと言える。

が、それは一方で、家持の目を、相聞歌以外のより広い世界に開かせる結果をもたらしたのである。恭仁京時代の家持の歌を精密に追った小野寛「久邇京の歌」『大伴家持研究』昭55・3)は、天平十五年八月十六日の日付を持つ、内舎人家持の恭仁京讃歌、

今造る久邇の都は山川のさやけき見ればうべ知らず
らし
(6)一〇三七

をとらえて、この日を境に「家持の歌から青春の相聞の世界が消えて行った」「家持の歌ははつきり世界を異にして来る」と指摘した。

黒木歌群においては、長屋王宅への太上天皇・天皇のいでましといった公的世界が意識されてきた。そして一重山歌群においては、軽い意味を持つに過ぎないとは言え、「今知らず久邇の都」(④七六八)が意識されていた。これらのことを、家持の歌が、限られた相聞の世界からより広い公的な世界へと開けていく、その先駆けをなすものとしてとらえることもできよう。

以上、恭仁京時代の家持の相聞歌に関して、具体的に指摘できるその特徴の一、二について述べた。大方の御批正をお願いしたい。

注

(1) 本稿引用の万葉歌の訓みは、『萬葉集(日本古典文学全集)』に依った。

(2) 森朝男氏の御教示に依る。

(3) この歌群の後にも、恭仁京にいる家持が、奈良の大嬢に贈った歌が五首収められている。その中に「夢にだに見えむと我はほどけども相し思はねばうべ見えざらむ」(④七七二)とある。ここでも大嬢が家持のことを「相し思」わないから、夢にさえも現われないと歌っている。

(4) ④七六七・七六八番歌二首は、家持が大嬢に贈った歌であって、藤原郎女は直接的には介在していない。しかし家持の意識としては、藤原郎女の「道遠み」を受けての「都路を遠みか」であって、当然郎女もこの二首を目にするのを念頭においていたものと思われる。もう少し言えば、④七六五番歌と七六六番歌とをやりとりしたのと同じような場が、④七六七・七六八番歌二首にもあったのではないか(郎女はこの二首に対しては「これを聞きて即ち和ふる」ことをしなかった)。さらに言えば④七六五く七六八の四首は同一の場での詠である可能性もある。

(5) 『萬葉集全注』巻第六は、紫香楽京での作の可能性があることを指摘しているが、たとえ紫香楽京での作であっても、本稿の趣旨には抵触しない。

(6) 一方は巻四(相聞)に、一方は巻六(雑歌)にと別々

に収められているのであるから、高丘河内の歌は家持・郎女歌群に直接和したものでないだろう。しかし内容的に言って、両歌群は密接なつながりをもっているゆえ、高丘河内が家持・郎女歌群を意識し踏まえて詠んでいることは確かであろうと思われる。⑥一〇三九番歌の「我が背子」は、『全註釋』が言うようにあるいは家持のことであるかもしれない。とすれば、高丘河内が家持への親愛の情を歌うに際して、家持・郎女歌群を踏まえて、相聞風の歌に仕立てたのが河内の二首であったと推定することもできる。

(7) 赤人たちの登場を促したのは、舎人・新田部両兄弟親王であった、との新たな修正意見もある（井村哲夫「機構の投影」『上代日本文学史』昭54・1）。

(8) さらに深読みをすれば、「あなたの家は、同じ黒木の家でも、みやびの限りを尽くした長屋王様の黒木の家とは違って、実際にはにわか作りの掘立小屋でしょう。」という皮肉を裏にこめているとも考えられる。

(9) 中国における風流とよばれる理念の構成要素は、琴・詩・酒・妓と幅広い（小西甚一「雅の意識と文人世界」『日本文芸史』I昭60・7）。その影響を色濃く受けている日本の「みやび」も、その意味するところは幅広い。従って、異性との交情におけるみやび性と黒木の持つみやび性とは、相通じる面を持つものと思われる。

(10) 村山出論文（『風流侍従』覚書―経歴の検討―）『帯

広大谷短期大学紀要』15号昭53・3、「風流侍従の歌―身人部王の位置―」『万葉とその伝統』昭55・6、「笠金村の從駕相聞歌」『日本文学』昭55・7等）、井村哲夫論文（前掲「機構の投影」）は、養老から天平の頃にかけて、宮廷にあって風流の雰囲気醸成するのに一定の役割を果たした、風流侍従の存在に注目した。本稿では、家持のみやびへの指向の背景にも、この風流侍従の影響が（間接的にしろ）あったであろうことを見通そうとしたが、具体的な指摘ができるまでに至らなかった。今後の課題としたい。

（付記）本稿は、昭和六十二年度上代文学会大会（於武庫川女子大学）の研究発表会での発表をまとめたものです。席上およびその後、多くの先生から御指導御助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。